

高松城跡

—— 県民ホール小ホール建設事業に伴う ——
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 7 年 3 月

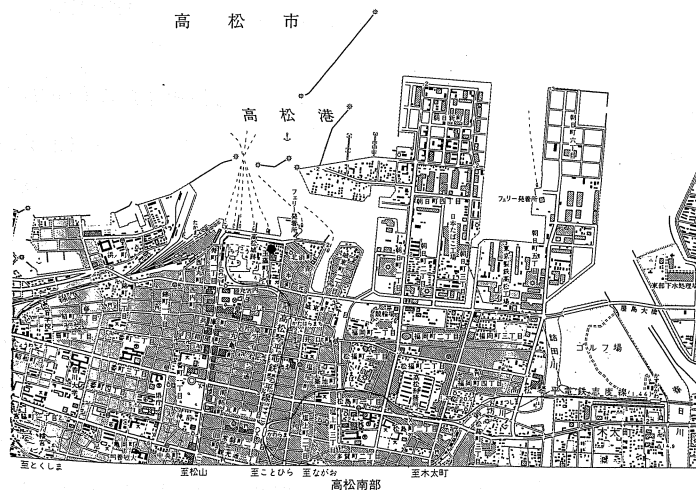
香川県教育委員会

例 言

1. 本書は香川県県民ホール小ホール建設事業に伴う高松城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査地は高松市玉藻町102-1に所在する。
3. 発掘調査は香川県教育委員会が実施した。
4. 調査は文化行政課係長藤好史郎および主任技師森下英治が担当した。
5. 本書挿図中のレベル高はすべて海拔高で、方位は第IV系国土座標に準拠する。また、挿図の一部に建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図「高松北部」を使用した。
6. 発掘調査、整理作業を通じて松平公益会、香川県土木部建築課、香川県埋蔵文化財調査センター、その他関係者各位より多大なご協力、ご援助を得た。
7. 本書の執筆は担当者が以下のとおり分担し、編集は森下が行った。

第1章……………藤好

第2～5章……………森下



目次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1 (藤好)
第2章 遺跡の立地と環境	2 (森下)
第3章 良櫓台石垣および付属突堤の調査	5 (森下)
第4章 出土遺物	7 (森下)
第5章 まとめ	10 (森下)
参考文献	

付図目次

付図1 史跡高松城跡 良櫓台付属突堤遺構図
付図2 史跡高松城跡 良櫓台石垣立面図
付図3 史跡高松城跡 良櫓台付属突堤立面図

挿図目次

第2図 調査地位置図2	3
第3図 高松城下図屏風(部分)にみられる小突堤	3
第4図 今回調査地と東ノ丸下層石垣の位置関係	4
第5図 良櫓台北面石垣部分実測図・刻印拓影	5
第6図 突堤断面図	6
第7図 出土遺物実測図(1)	8
第8図 出土遺物実測図(2)	9
第9図 良櫓台付属突堤絵図表現略図	11

図版目次

図版1 良櫓台および付属突堤全景
図版2 良櫓台石垣(北から)
図版3 良櫓台石垣(東から)
図版4 突堤取り付き部分(東から)
図版5 良櫓台石垣基底石(東から)
図版6 良櫓台石垣基底石の控え部分(北から)
図版7 突堤東面(南より)
図版8 突堤西面(北より)
図版9 突堤断面(北より)
図版10 良櫓台石垣北面下部(北から)
図版11 良櫓台石垣北面下部の刻印(北から)

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

県民ホールの北側に、史跡高松城跡東ノ丸の石垣と良櫓を挟んで、小ホールの建設が計画された。建設計画地の範囲の中には良櫓から派生する突堤の存在の可能性が考えられた。

17世紀中頃、高松松平藩初代藩主松平頼重入部時の高松城下を描いた「高松城下図屏風」には高松城東ノ丸の築造直前の状況が描かれており、その中に東ノ丸の相当地と考えられる箇所には突堤が描かれている。また松平期に先行する生駒期の城下の様相を描いた「生駒家時代讃岐高松城屋敷割図」には三ノ丸から東ノ丸にかけての海岸部に「捨て石」と記載された波消しが描かれている。また19世紀初頭の文化年間および19世紀中頃の弘化年間に描かれた城下図には、良櫓の櫓台の西端に接するように突堤が描かれている。その後の資料としては、海岸線が埋め立てられる以前の状況については、大正時代初期の高松城を海上撮影した写真があり、良櫓の東北隅からのびる堅固な石積みの突堤が映し出されている。この状況は、明治時代初期に作成された高松城の測量図には非常に明確な表現で長大な突堤が描かれている。突堤の位置規模から両者は同じものである。19世紀のはじめと終わりころの図で突堤の表現されている位置は異なる。江戸期の城下図については高松城そのものについては簡略な表現であり、どの程度の精度があるかは問題となるものであるが、異なる城下図に同じように表現され、しかも良櫓東北隅からのびる突堤を両者とも描いていないことは注目される。高松城下図等に描かれた突堤は基本的には西浜舟入と東浜舟入及び月見櫓の西側の三ノ丸の北面石垣から北に延びる3カ所に設置されている。この内東西の舟入の突堤は西側が東側より北に長く延びており、西からの波を防ぐような構造を持つ。月見櫓の南には船着き場ありそのために三ノ丸の突堤は築かれたものと考えられる。19世紀の初頭から中頃にかけての城下図に表現された突堤と良櫓の東北隅からのびる突堤の位置のずれは、後者の築造時期やその機能的な面からも注意されるべきものである。

発掘調査例としては、昭和60年4月から昭和61年5月にかけて実施した県民ホール建設に伴う発掘調査がある。東ノ丸築造前の17世紀前半～中頃にかけての石垣を検出するとともに良櫓のよりの箇所では人為的に石が集積された箇所を確認している。このことは東ノ丸築造の際に良櫓は元々あった石積みの突堤上に築かれた可能性も完全には否定できないものであった。

こうした状況から、小ホール建設予定地に建っていたホテルの解体撤去後、平成6年4月に試掘調査を実施した。試掘調査では4本のトレンチを設定したが、良櫓の東北部に設定した第1トレンチでは突堤側面に相当すると考えられる石積みを確認し、その西側に設定した3本のトレンチでは捨て石と考えられる集石を確認した。

高松城跡東ノ丸は史跡石垣および良櫓台に沿って史跡指定がなされている。史跡指定範囲は、良櫓の北面で3.7～3.8m、東面では0.7mの幅である。発掘調査にあたっては文化庁記念物課と協議を行い進めた。発掘調査では突堤と石垣の関係を解明するため、史跡指定地の櫓に接する箇所の埋土も除去する必要がある。そのため発掘調査のための現状変更許可申請を文化庁長官に提出し、許可の通知を受けた後、平成7年2月～3月にかけて発掘調査を実施した。発掘調査が史跡の良櫓の保存状態に影響を及ぼさないよう細心のしなから調査を実施した。検出した石積みの突堤は良櫓の基壇石積の積み上げ後築かれたものであることが確定した。

発掘調査だけでは上限が特定できたものの築造時期を特定するには至らなかった。しかし高松城を描いた江戸期資料に他の櫓においても全く櫓からのびる突堤は描かれていないことに注目するべきで、その状況は突堤の目的と城の防御面での機能を反映した結果と考えられ、そこに突堤の築造時期の解明の手がかりがある。

発掘調査終了後は、埋め戻しを行い旧状に復した。発掘での史跡指定の良櫓・石垣への影響は生じなかった。

第2章 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

高松城は北側の防備を瀬戸内海に託し、南の縄張りを堅固とした典型的な水城である。海という自然地形を利用した城郭構造は、もっぱら山塊の自然遮蔽をもって防備した中世山城と比較して、近世段階において新たに採用された要素であり、築城に当たっては地理的条件の検討がきわめて重要であったものと思われる。

当該地は現在石清尾山丘陵の西側を流れる香東川が、付け替えによって現在の流れになる以前は、川の氾濫によって形成されたデルタが存在したものと推定される。高松城のこれまでの発掘調査（真鍋編1987）において、洪水によってもたらされたと推定される粗砂層中から、弥生時代や古墳時代の土器片が著しく磨滅した状態で出土することがあり、旧香東川の氾濫を物語る。

調査地点付近のボーリング柱状資料によると、現地表から約30m下までこのような砂礫層が厚く堆積しており、その下に粘土層が存在している。その下にはさらに砂礫層やシルト層が認められ、地表下約50mで更新世前期の三豊層にいたる。下部の砂礫層は更新世中期から後期にかけて堆積した扇状地性堆積物であり、上部の砂礫層はもっぱら縄文海進段階の海性堆積物と推定される。

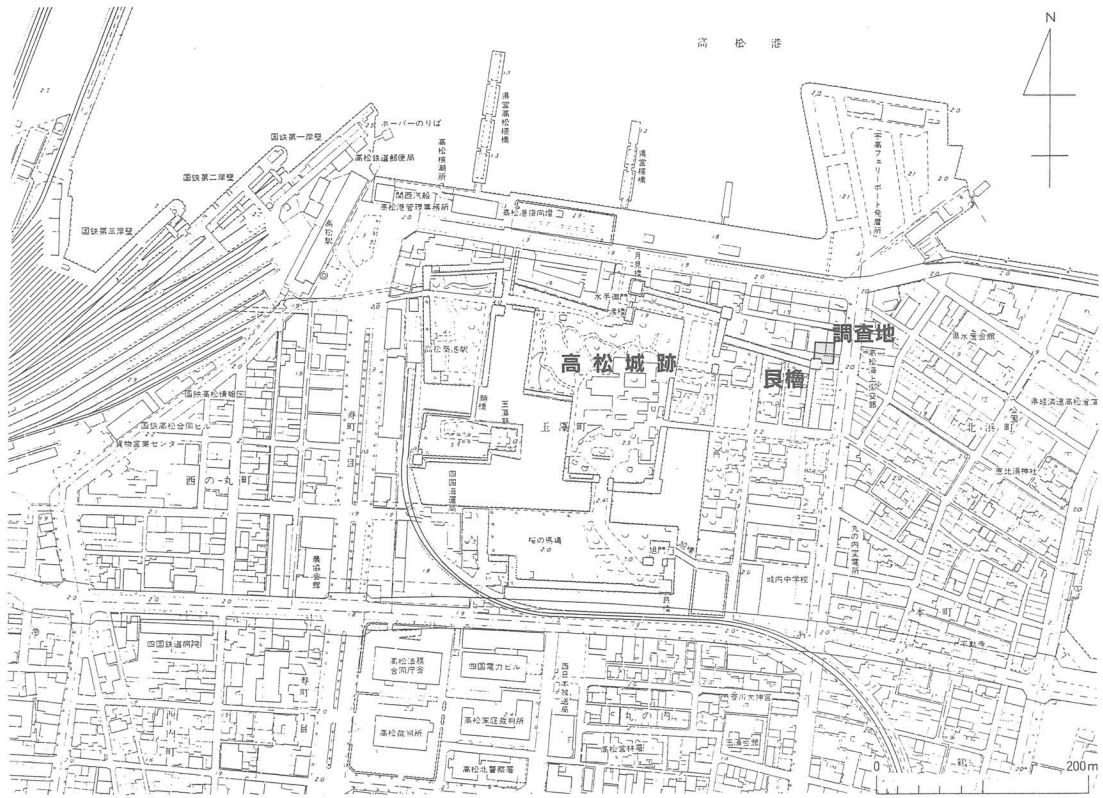
高松城跡において城郭以前の遺構が確認されるのは、東ノ丸の調査においては中世の鎌倉時代末期ごろからである。この地が生活域として安定した時期を示しているものと思われる。

2. 歴史的環境

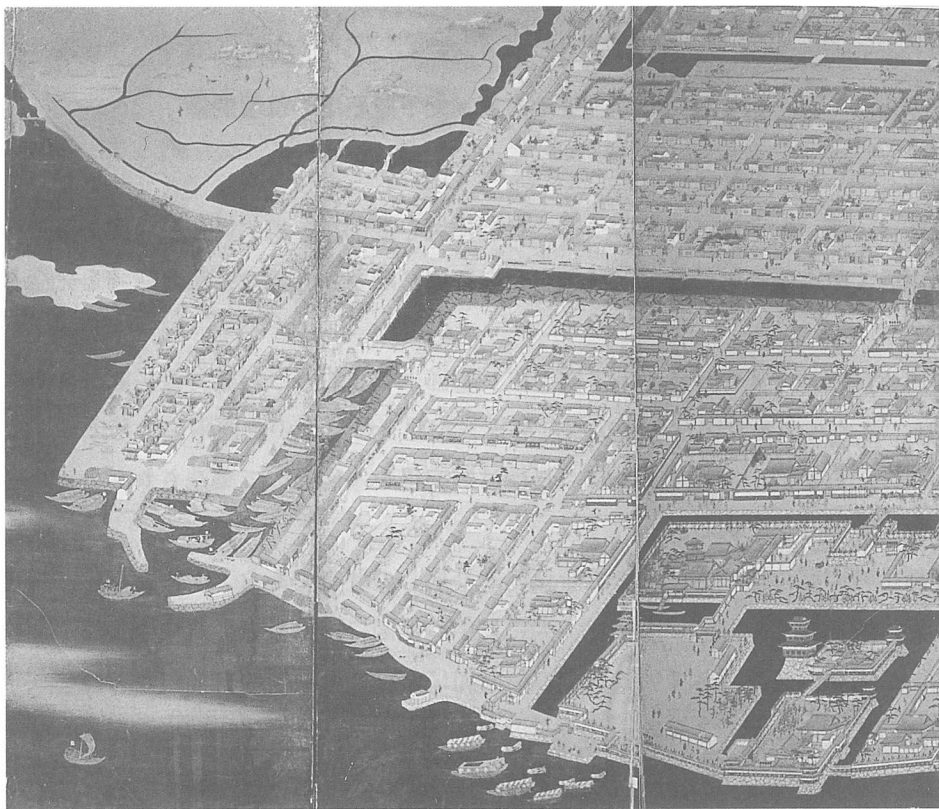
史跡高松城跡は香川県高松市玉藻町に所在し、一名「玉藻城」ともいう。天正15年（西暦1587年）生駒親正が、豊臣秀吉から讃岐藩主に封ぜられ、その居城として翌16年から築造に着手した城で、生駒家4代とその次の藩主松平氏の11代、前後280余年にわたる讃岐統治の拠点であった。現在の高松市街は高松城の城下町として発達したもので、今もなお県庁所在地として県内の経済・交通・文化の中心地の機能を果たしている。

今回調査対象となった東ノ丸良櫓台（第2図）付近の推移を簡単に辿ると、松平頼重の入部の際には現在の東ノ丸はまだ築造されていない。生駒時代の縄張りを示す寛永15(1638)年頃製作の「生駒家時代讃岐高松城屋敷割図」（高松市図書館蔵）によると、東ノ丸築造前の城郭の東側は「いなほのたな町」や「とぎや町」など棚（店舗関係）が多く、東舟入を中心として城内・城下の台所をまかなう漁港の役目を果たしていたことを示す。松平頼重の入部後と推定される「高松城下図屏風」（17世紀末頃）には、後の東ノ丸の位置に小規模な突堤が築かれ、番屋が置かれている（第3図）。

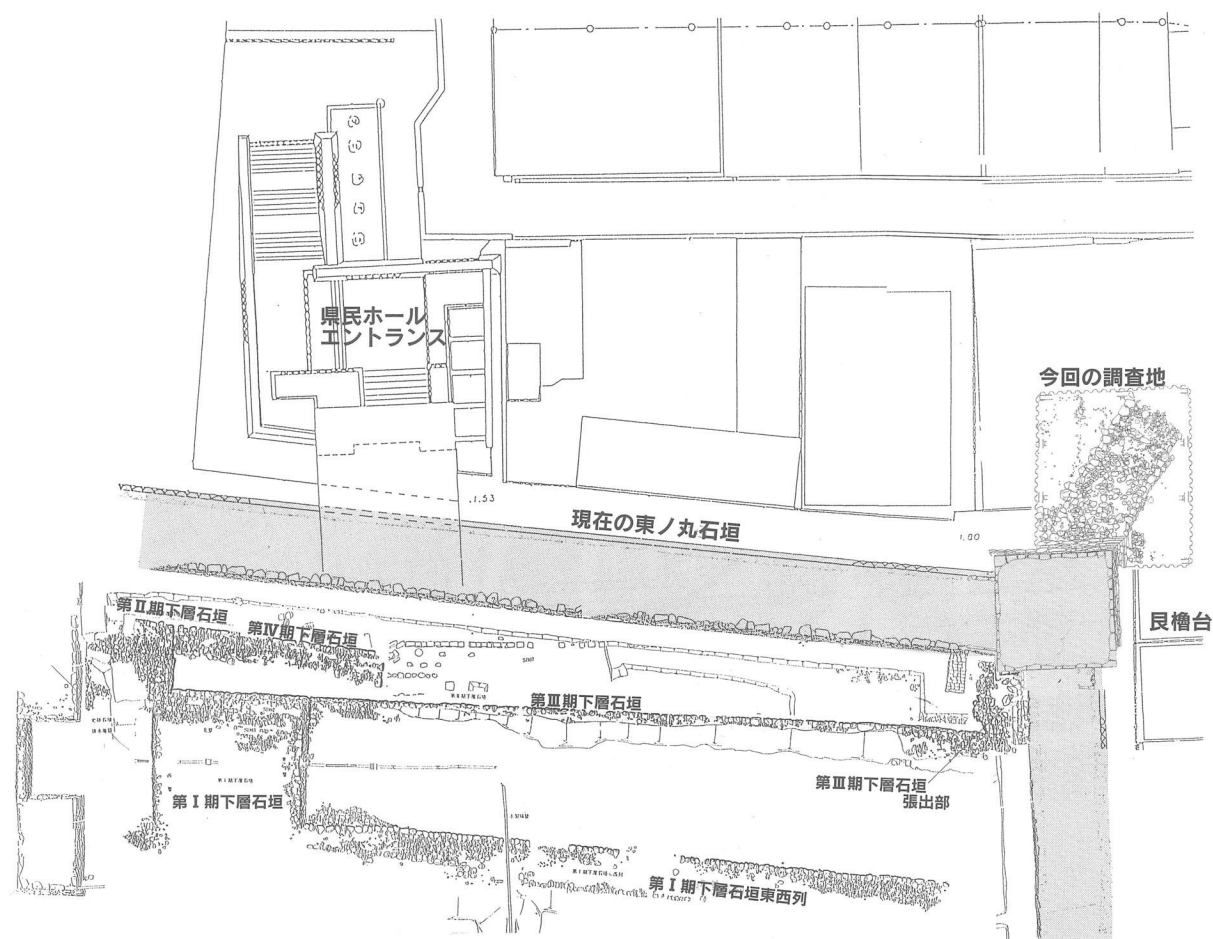
東ノ丸の築造は寛文11(1671)年の城内の堀の浚渫、および翌年の城の修理についての許可に基づいて行われたものと考えられる。事実上、新規の廓の増設である。一方で、頼重入封後、小規模な石垣の修復や拡張は少なくとも三ノ丸の北東出入口付近では頻繁に行われてようである。先の県民ホール建設地の調査では、現在の東ノ丸の下層から4期にわたる石垣が検出され、大規模な東ノ丸築造が行われる前から、主として出入口番屋機能の強化等を目的としたと推定される小改修が明らかとなっている（第4図）。



第2図 調査地位置図2



第3図 高松城下図屏風（部分）にみられる小突堤



第4図 今回調査地と東ノ丸下層石垣の位置関係

東ノ丸の築造は、三ノ丸東側の町屋の一部に新たに堀を掘削し、南北に細長い廓を築造するもので、これにより柵が多く分布する町屋部分と城内が完全に切り離され、城の東側の防備を完全なものとしている。

東ノ丸北西隅の長櫓は、先の「高松城下図屏風」絵図上の小規模な突堤付近に該当するものと考えられる（第3図）。東ノ丸調査で明らかとなった第Ⅲ・Ⅳ期下層石垣の北西隅に、若干の張出が認められる（第4図）が、これが旧小突堤であれば、長櫓は旧突堤を基礎として築造されていることになる。今回の調査の確認事項の一つである。

明治以降は高松城の堀の埋め立て、また石垣の取り崩しの歴史である。明治28年の高松市街地図ではまだ東ノ丸付近は埋め立てられていないが、大正10年の地図には、東ノ丸北面の海岸が埋め立てられ、長櫓と堀との間に道路が新設されている。その後昭和にかけて堀も埋め立てられ、昭和12年の地図では堀や突堤の痕跡を見ることができない。

第3章 長櫓台石垣および付属突堤の調査

1. 調査の方法

調査地は明治時代末期から昭和30年代にかけて中堀が埋め立てられるまでは、海中に位置した場所である。試掘結果からも大量の海水の流入が予想されたため、調査区周辺に綱矢板を設置し、切り張り等の安全策を講じながら、大型の水中ポンプで常時排水しつつ掘削した。今回の調査における確認項目は長櫓台石垣および付属突堤の遺存状況の点検および記録である。海性堆積である土層序については安全上の理由も含めて、記録することを断念せざるをえなかった。

調査は仮設工事の終了後、バックホー等の重機により掘削を開始して突堤石垣の上面に到達した段階で人力による精査に切り替えた。長櫓台石垣については50cmほどの至近まで重機で慎重に掘削した後、人力で表面検出を行った。

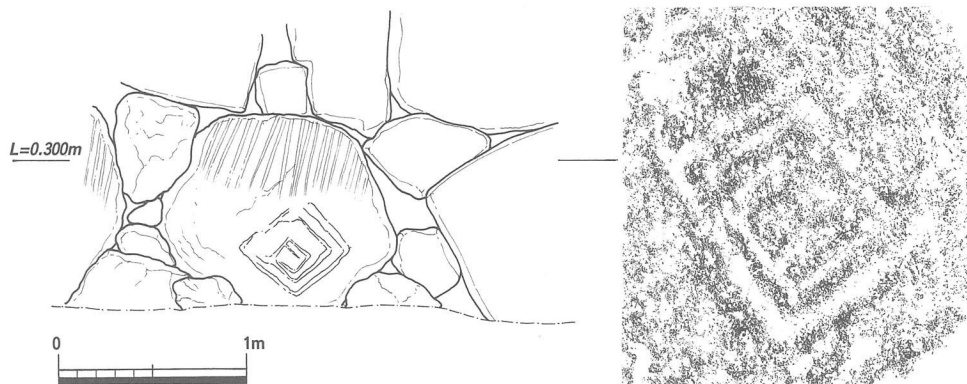
遺構検出後、写真測量を行い記録したのち、突堤石垣については慎重に除去して下層の状況を確認した。

2. 長櫓台石垣について

調査前、当石垣については現地表から高さ3.8m、5～6段の石積みが確認されていた。櫓台上部には昭和40年まで、櫓が遺存しており、現在は城の南東部の旧太鼓櫓台に移築されている（高松市 1967）。

調査の結果、櫓台石垣は高さ7.8mであることが判明した（付図2）。根石は現地表から2.9m、5石目に認められ、隅石の大きさは幅1.9m、高さ0.8mで、櫓石垣の構成石の中でもっとも大きいものである。隅石は稜線を意識した面合わせを行っているが、東面の一つ南側の根石は未加工の自然石を用いており、根石列はその多くが自然石を用いている可能性が高い。

根石と第1石とは35cmほどの控えを介している。第1石以上の隅石は、典型的な算木積みで、その勾配は現地表下で約70°、地上部で約80°と、現地表部付近を境としてその上部に緩やかな反りが認められる。石材は加工された花崗岩で、1m角程度の石材が多い。石材表面には縦方向の筋目の加工痕をもつものが多い。また、北面中央の基底に近い石の表面に菱形の刻印が認められた（第5図）。



第5図 長櫓台北面石垣 部分実測図・刻印拓影

3. 櫓台付属突堤の調査

櫓台の北東隅で、突堤石垣を検出した。櫓台の北東隅に接して、概ね北東方向に直線的に延びる。検出面は現地地表下2.9mの深度で、基底部幅6.5m、現存高1.2mをはかる。石積みは2～3段が遺存しており、明治中頃の写真を参考にすると、上部約1.5mほどが損壊しているものと判断できる。使用される石材は、櫓台石垣がほぼすべて花崗岩で構成されるのに対して、突堤は安山岩を中心に、多様な石材を使用している。大きさも長径50～60cm程度の自然石が多く、櫓台に比べ小振りである。

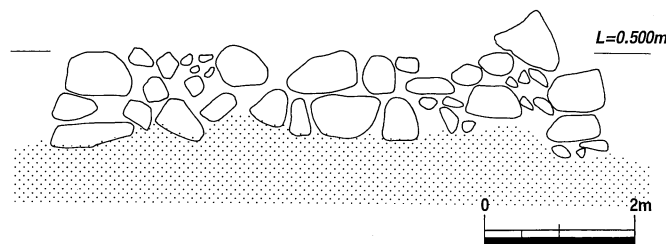
石の積み方は、自然石であるがために雑積みとなるが、東面が比較的整然と石積みが遺存するのに対して、西面は積み直しあるいは部分的な崩れや乱れが多い。

櫓台石垣との構造的関係は、突堤の東側石積みが良櫓の北東隅根石の控え部分(張り出し部)に乗った状態で検出しており、そのほかは構造的に関連しあう個所は認められない。

4. 下層確認

高松城下図屏風(17世紀後半)は東ノ丸築造前の高松城の姿を記録した屏風絵である。第2章でも述べたように、内堀からやや東に離れた箇所に短く突き出た小突堤石垣が表現されており、東ノ丸第Ⅲ・Ⅳ期下層石垣から現在の良櫓台に向かってみられる張り出し部がその痕跡である可能性が考えられた。したがって、良櫓およびそれに付属する突堤はこの過去の突堤を基礎として築造した可能性も考えられた。このため、検出した突堤の構成石を取り外しながら、下層に埋没した可能性のある旧突堤石垣を探索した。

調査の結果、第6図にみるように突堤石垣の内側中軸線付近にやや大型の石材が置かれ、外表の石垣との間に小・中型の石材が充填される状況が確認できたが、下部に別の石垣がみられる訳ではなかった。したがって、先の小突堤を基礎として当該突堤が築かれたものではなく、良櫓築造後にあらたに付属された突堤であることがわかる。



第6図 突堤断面図

第4章 出土遺物

調査中に出土した遺物は、重機等により突堤の上面を確認した後に、人力で突堤のプランを検出した際に取り上げられたものである。28リットル入りコンテナ2箱分に相当する。内容は陶磁器類・瓦類である。これらの出土遺物は突堤が機能していた段階に海面下に堆積した砂層中に埋もれたものである。

1. 陶磁器類（第7図）

1～9は肥前系染付である。1は中皿で底部中央に方形区画の文が観察できる。「福」文と推定される。胎土は灰色系で呉須は暗黒青色。18世紀後半ごろの所産。2は碗で、黒色微砂粒を含む明白色系の胎土をもつ。外面に明青色の鳥花文を描き、底部中央に牛／円の銘をもつ。幕末以降の所産である。3は端反形の中皿で外面に花文を施す。胎土は黒色砂粒を含まない明白色系。19世紀ごろの所産。4、5は碗で、4は黒色砂粒を含まない明白色系胎土、5は灰色系胎土をもつ。6は小碗で外面に竹梅文を施す。胎土は明白色で、海水等による器壁の荒れが著しい。7は端反形の碗で、外面に牡丹文を施す。胎土は明白色系。19世紀代の所産。8は皿で口縁端部に口銹があり、内面は唐草文と推定される。9は徳利底部で内面にも透明釉をかける。外面は精緻な草花文。

10～13は瀬戸美濃系陶器。10、11は大皿で乳灰黄色釉を、12、13は大徳利と碗高台で、それぞれ黄褐色釉をかける。

14、15は陶器の脚台付灯明皿で灰黄白色胎土に茶褐色の釉がかかる。形態的に幕末ごろの所産であろう。

16～20は備前系陶器で、20は水差し、それ以外は播鉢である。播鉢は口縁部内面に凹線が施されていることから、堺産と推定される。播目はいずれも荒く、口縁部外面を幅広く拡張するものと、拡張度合いが少ないものの2種類がある。

21は土師質の土鍋で、口縁部にわずかな凹線が認められる。

22～28は焙烙で、22～25は瓦質の型作りタイプ、26～28は土師質である。内耳部は残存しないが、技法と口縁部形態から前群は幕末ごろ、後群は19世紀前半頃の所産と考えられる。

29は土師質の壺口縁で、形態的に備前焼を模倣した可能性がある。

30～32は無釉陶器の灯明皿で、31と32は抉入りの「かえり」がある。19世紀頃の所産であろう。

33～37は土師器小皿で、底部に糸切り痕を残す。

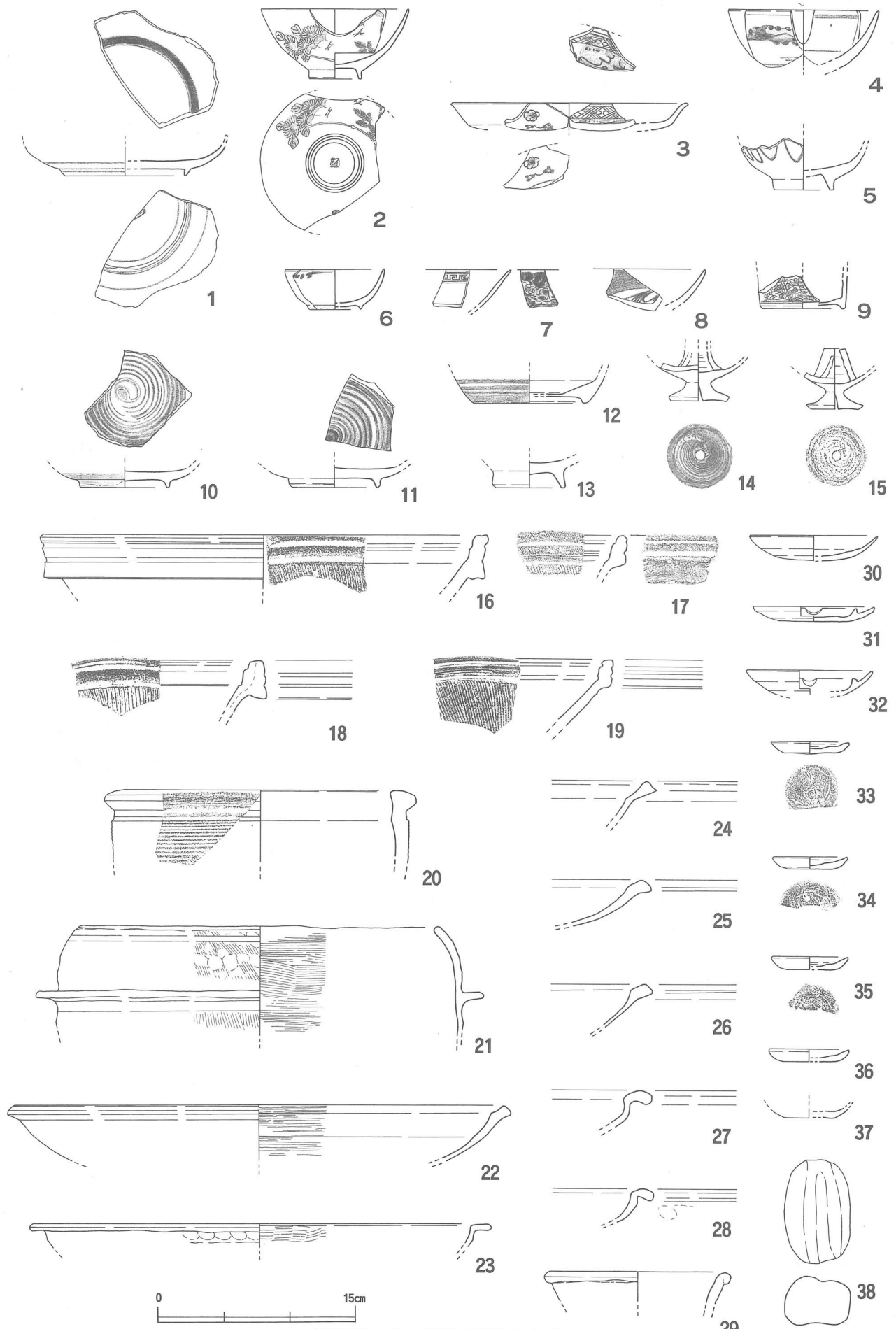
38は土錘で、重さは150gをはかる。縦方向に紐通し凹部が巡る。

2. 瓦類（第8図）

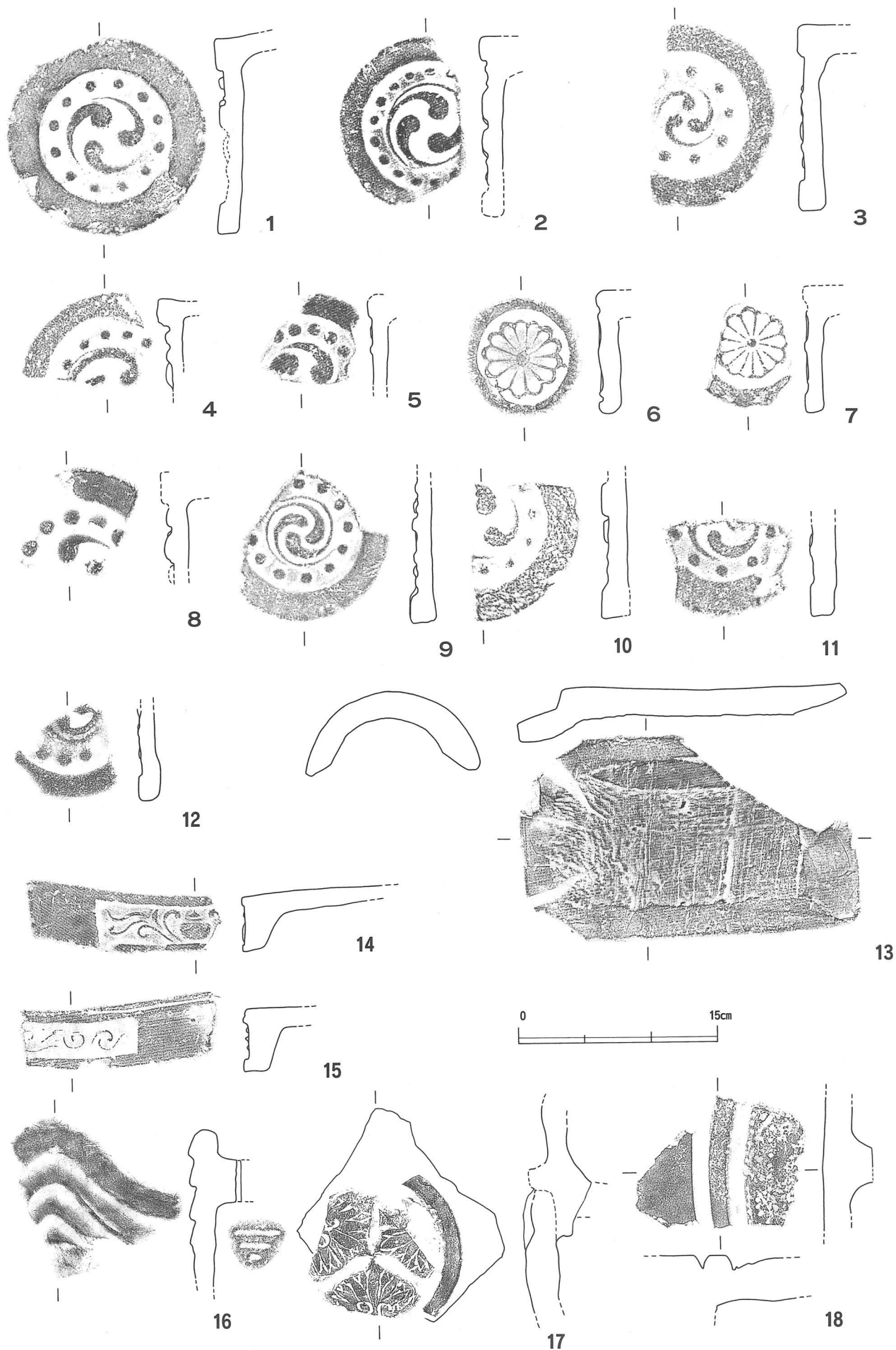
軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、鬼瓦がある。

1～12は軒丸瓦で6、7が菊文の小型瓦であるほかは、直径12～15cm大の巴文瓦である。巴は尾線が長く180度以上回転するもの（2・9・12）と、短く収束するもの（1・3・8・10・11）がある。14・15は軒平瓦で、14が均正唐草文、15が偏行唐草文である。13は丸瓦で、焼きがあまく土師質に近い。内面に荒い縄目をとどめ、それを横方向に削り調整している。

16～18は鬼瓦の小片で、17は三葉葵文を施す。葉部は浮き彫りで、内部文様は線刻による。18は内側文様区に細かな刺突を施す。



第7图 出土遺物実測図(1)



第8図 出土遺物実測図(2)

第5章 ま と め

今回の調査の結果、良櫓の櫓台石垣の全体法量、および付属突堤の地下遺存状況が確認された。良櫓台石垣は、花崗岩を加工した石材を用いて、東面については一段ごとに「布目積み」が行われている。北面については一部「落とし積み」がみられるが、全体としては加工石材を使用する「間知積み技法」にのっとった、緩やかな反りを呈した石積みと推定される。石垣構築の変遷から考察すると、慶安期から文化・文政期にかけて行われたⅣ期石垣（北垣編年）に相当するものであろう。文献上の東の丸築造の年代（17世紀後半）と矛盾はない。

突堤については、構築に際して良櫓台と関連するところはなく、石材の状況からみても、櫓台構築後に付設されたものと推定された。また、「高松城下図屏風」にみられる東ノ丸築造以前の小突堤との関係は、今回の調査においては明らかにできなかった。良櫓の下部にはその基礎として遺存しているかもしれない。

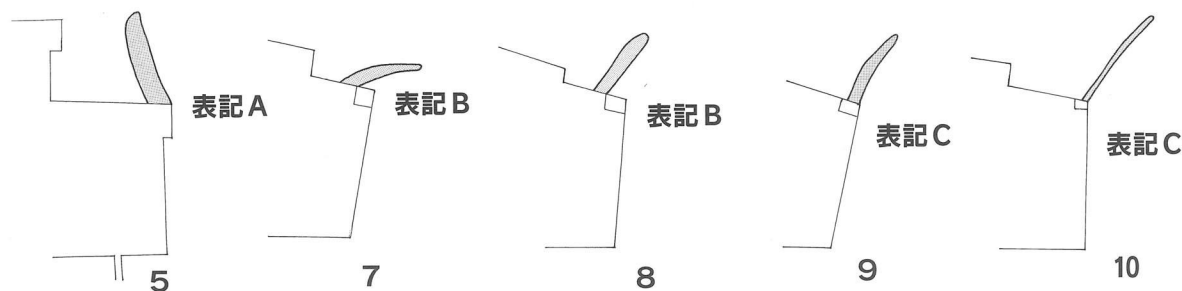
さて、今回検出した良櫓台付属突堤については、考古学的にその築造時期を明確にすることはできなかったが、各所に残る絵図に表現された突堤を辿ることで、ある程度の推定が可能である。関連する絵図を概ね時代順に並べたもの下表に示す。

良櫓台付属突堤関係絵図一覧

番号	絵 図 名	年 代	東ノ丸	先行突堤	良櫓突堤	備 考
1	高松城下図屏風	年代不明17世紀中頃か	—	○	—	松平公益会 『香川県史』第3巻通史編 近世Ⅰ(1989)
2	讃岐高松丸亀両城図 高松城図	年代不明	—	×	—	前田育徳会尊敬閣文庫蔵 『香川県史』第3巻通史編 近世Ⅰ(1989)
3	讃岐国高松城図	年代不明	—	○	—	国立公文書館蔵 『香川県史』第3巻通史編 近世Ⅰ(1989)
4	高松城下図	享保年間1716～36 大正15年写	○	—	×	鎌田共済会郷土博物館蔵
5	元文5年 讃岐国高松地図	元文5年 1740 昭和13年写	○	—	表記A	鎌田共済会郷土博物館蔵
6	日本輿地南海道郡郷部讃州高松地図	正徳享保年間 宝暦7年(1757)写	○	—	×	金刀比羅宮蔵
7	高松市街古図	文化年間 1804～18	○	—	表記B	高松市歴史資料館蔵
8	東讃高松地図	弘化年間1844～48	○	—	表記B	香川県立図書館蔵
9	天保15年高松之図	天保15年1844 昭和3年写	○	—	表記C	鎌田共済会郷土博物館蔵
10	高松城全図	不明慶応年間？ 昭和6年写	○	—	表記C	鎌田共済会郷土博物館蔵 『香川県史』第3巻通史編 近世Ⅰ(1989)

(絵図の詳細については森下友子氏のご教示による)

絵図に表現された良櫓付属突堤は、突堤の延びる方向と、基点の取付位置によって3つのパターンに分けることができる。〈表記A〉櫓台を基点として北西に延びるもの、〈表記B〉櫓台の少し西に基点がありそこから北東方向に延びるもの、〈表記C〉櫓台に基点があり、そこから北東方向に延びるもの、がある（第9図）。時期別に見ると、表記Aが18世紀中葉にみられ、その後18世紀後半の絵図には突堤の表記が無く、表記Bが19世紀前半、表記Cが19世紀中葉以降となる。各絵図に表現された突堤が実態を細かく反映したものとすれば、今回確認した突堤は表記Cに該当するものと言え、築造時期は19世紀中葉と考えられる。しかし、細かな部分の表記に多少の誤差があるとすれば、基点がやや西にずれた表記Bも同一のものである可能性がある。その場合は、19世紀前半が築造の時期となる。



第9図 良櫓台付属突堤絵図表現略図

ところで、城郭に関する普譜については幕府の厳格な規制の元にあったと考えることが通常である。事実、東の丸築造に関しては、城内の堀の浚渫および城の改修という名目で幕府の許可を取った後に、事実上郭の新設を行っているのである。このような城内の普譜とそれに付随する港湾施設の普譜については、どのような関連があったのであろうか。突堤については、今回調査を行ったもの以外においても、多数の突堤が各種石垣・櫓から海中へ派生しており、その変遷は絵図でみる限り比較的多くの新設等が認められる。また、絵図において、突堤の表現があるものと、ないものが混在していることも注目される。すなわち、基本的には二者の普譜については互いに関連するところなく、別系統の手続きの元に行われたとみるべきであろう。これは、良櫓台石垣と突堤石垣の構造上の関連性がないこと、また、石積みの構造が異なることなどと一致する。

突堤は、明治初年頃に描かれたと推定される高松城全図において、非常に長い規模に描かれている。これは突堤の築造後、さらに延長工事等が実施されたことを物語る。突堤西面に観察された補修痕なども港湾の維持管理を目的とする工事の一環として実施されたものであろう。突堤は明治後半頃から行われた埋め立て工事において、地表下に埋没した。ただし、大正10年の高松市街全図には、埋め立て後もその先端部分はまだ遺存している様子が窺われる。また、埋め立て後の旧突堤部分および櫓東側にはそれぞれ道路が付設されている。この道路の東側石垣が、調査後の工事の際に確認されている。

突堤が最終的に埋没した状況を確認できるのは、昭和12年高松市街全図である。

<参考文献>

- 大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館
- 大橋康二 1993 『考古学ライブラリー55肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
- 香川県 1989 『香川県史 第3巻 通史編 近世I』
- 香川県教育委員会 1987 『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』
- 北垣聡一郎 1987 『石垣普譜』
- 高橋 学 1992 「高松平野の地形環境」『讃岐弘福寺領の調査』高松市教育委員会
- 高松市 1967 重要文化財高松城旧東之丸良櫓移築修理工事報告書
- 三浦正幸 1993 「石垣の変遷」『復元体系 日本の城 9城郭の歴史と構成』ぎょうせい

ふりがな	たかまつじょうあと							
書名	高松城跡							
副書名	県民ホール小ホール建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	藤好史郎・森下英治							
編集機関	香川県教育委員会事務局文化行政課							
所在地	〒760 香川県高松市番町2-1-10 NTTビル 電話 (代)0878-31-1111							
発行機関	香川県教育委員会							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
総頁数	目次等	本文	観察表	図版	写真枚数	挿図枚数	付図枚数	
20頁	4頁	16頁		3頁	11枚	9枚	3枚	
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町	遺跡					
たかまつじょうあと 高松城跡	かがわけんたかまつし 香川県高松市 たまもろちょう 玉藻町	37201		34度 20分 47秒	134度 3分 22秒	1995. 2. 1 \ 1995. 3.31		ホール 建設
収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高松城跡	城郭跡	江戸時代	石垣・突堤		土師器・陶磁器・瓦類			



図版1 良櫓台および付属突堤全景



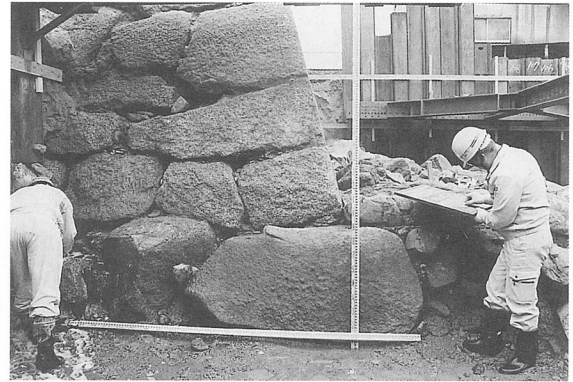
図版 2 長檜台石垣（北から）



図版 3 長檜台石垣（東から）



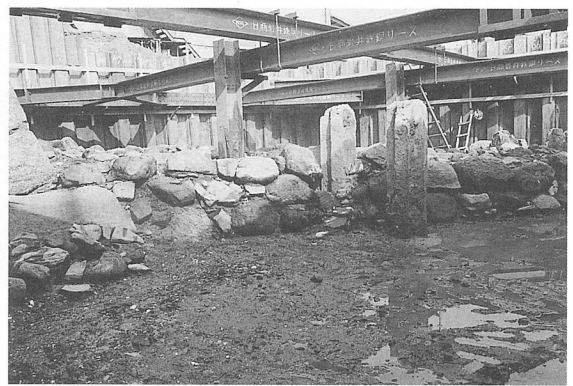
図版4 突堤取り付け部分（東から）



図版5 長檜台石垣基底石（東から）



図版6 長檜台石垣基底石の控え部分（北から）



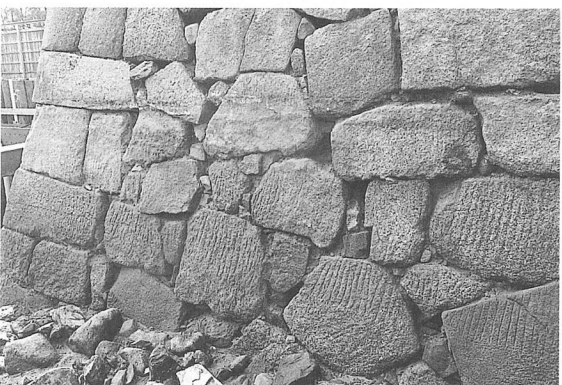
図版7 突堤東面（南より）



図版8 突堤西面（北より）



図版9 突堤断面（北より）

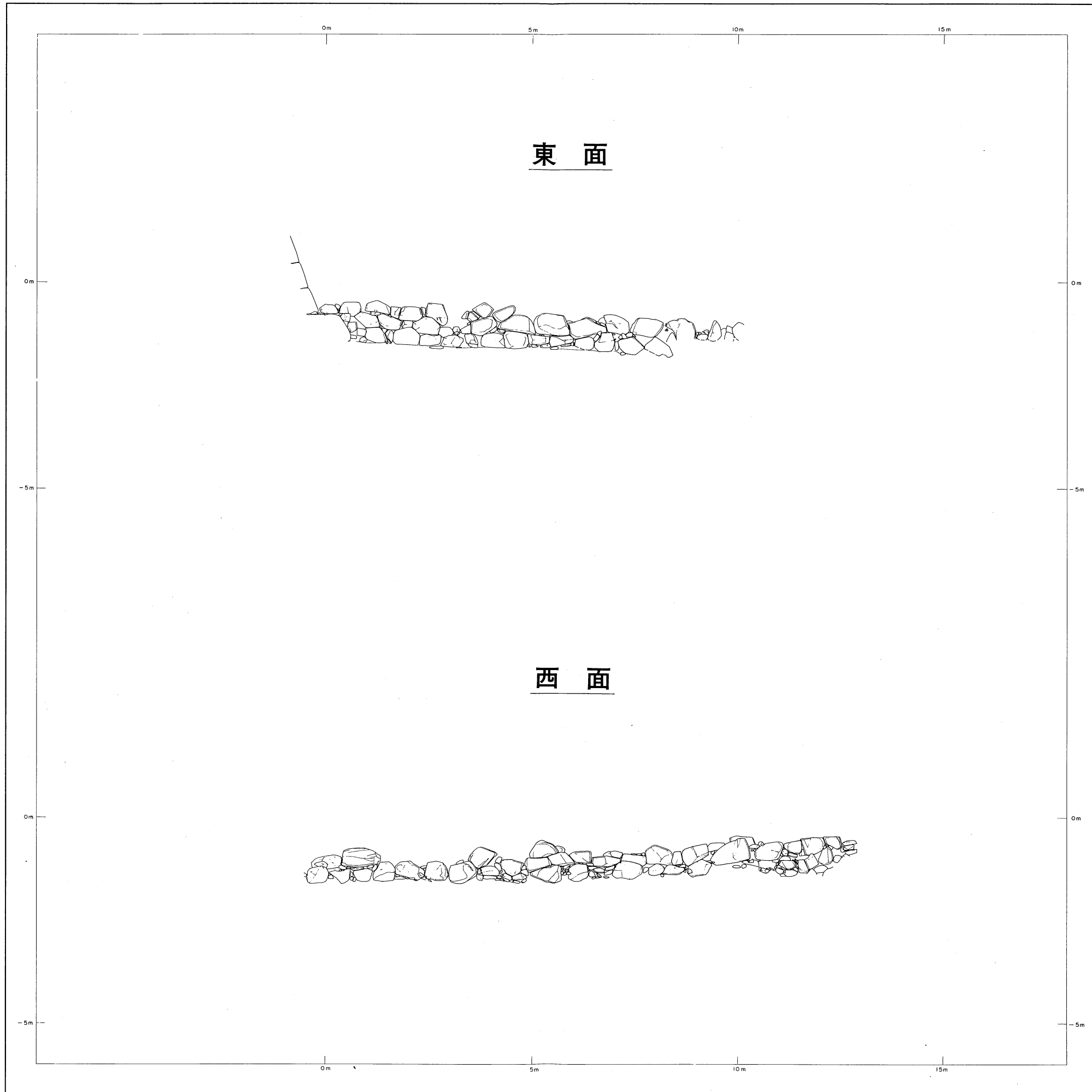


図版10 長檜台石垣北面下部（北から）



図版11 長檜台石垣北面下部の刻印（北から）

史跡 高松城跡 長櫓台附属突堤立面図



アジア航測株式会社調製

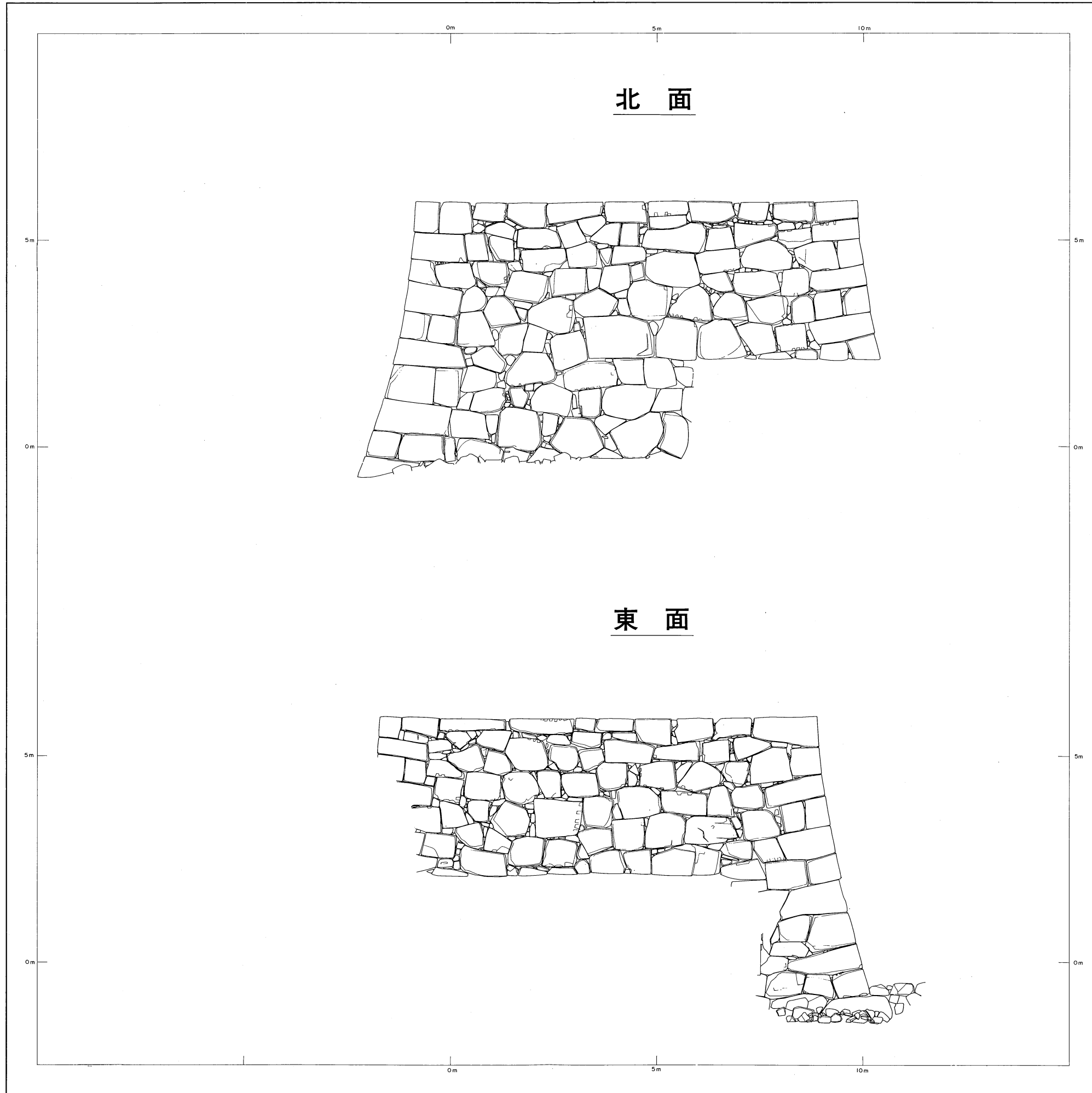
香川県教育委員会

撮影 平成 7 年 3 月
測図 平成 7 年 3 月 オートグラフA7
座標系 第IV系
等高線間隔 10cm

1 : 100



史跡 高松城跡 長櫓台石垣立面図



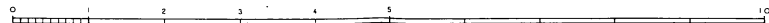
アジア航測株式会社調製

香川県教育委員会

撮影 平成7年3月
測図 平成7年3月 オートグラフA7

座標系 第IV系
等高線間隔 10cm

1:100



史跡 高松城跡 良櫓台付属突堤遺構図



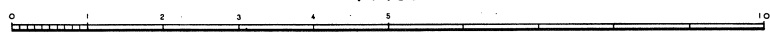
アジア航運株式会社調製

香川県教育委員会

撮影 平成 7 年 3 月
 測 図 平成 7 年 4 月 オートグラフィA7
 ※標高値 突堤部は符号がマイナスである。

図 様 高 取付系
 等 高 線 間 隔 10cm

1 : 100



県民ホール小ホール建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

高 松 城 跡

平成7年3月

編集・発行 〒760
香川県高松市番町2丁目1-10 NTTビル
香 川 県 教 育 委 員 会

印 刷 株式会社 中央印刷所